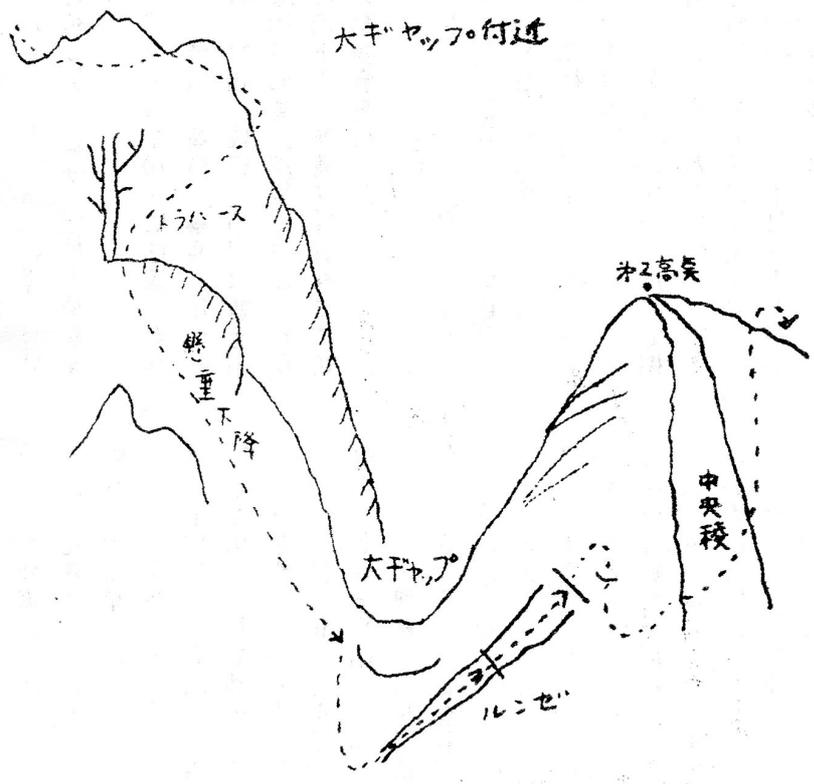


八がいた。彼らは一昨日、昨日と時々一緒にあった人達だった。昨日は仙水峠の仲間の所まで行くといっていたがやはり無理だったのたろう。1人が出発の時、ザックを上げた瞬間「ギックリ腰」をやってしまった。大変だ。ルンゼ杖を抜けると頂上だった。トツプをゆく杉澤が頂上に立った時、

ちょうど雲上に太陽が出てきた。そして大橋、毛利、私の順で頂上に立つ。長い道のりだった。そして私には冬山10シーズン目の記念すべき頂きだった。(文中敬称略)

(73年11月30日発行機関誌「くろゆり」第5号に収録)

解読 鋸岳から甲斐駒の縦走は会とし



(ルート図は当時のものを使用しました)

て大きな課題であった。なぜならばこれらの岩と雪のルートの経験が将来北アの冬山の基礎となるからである。しかし、実際は想像し

ていた程でなかったことは、前年来、会の実力が着実に向上してきた証しといえた。

第6期冬山合宿

# 聖岳東尾根

3011m

後藤 隆徳

●聖岳東尾根→聖岳→上河内岳→茶臼岳

▽78年12月30日～79年1月3日

▽Aパーティー 12月30日出合所

小屋泊、12月31日2632m泊

1月1日聖岳をへて聖平小屋にて

B隊と合流。

CL後藤隆徳(31) SL杉澤康秀

(29) 総務毛利哲也(45) 装備佐

野喜之( ) 医療大橋 孝(21)

気象川口智也( )

▽Bパーティー 12月31日出合所小

屋泊、1月1日聖沢をへて聖平に

てA隊と合流。

SL山口 清(34) 竹端節次

(40) 小川広太郎( ) 坂牧洋子

( ) 栗城昭子( )

▽Cパーティー 1月1日横澤小

屋泊、1月2日茶臼岳でA・B隊

に合流。

『とりくみ』

1、78年6月16日～18日に後藤、

佐野、川口の3名は出合所小屋か

ら東尾根をへて聖岳に登り、聖沢

を下降して偵察を行った。

2、10月1日に後藤、川口は荷上

げ品の買出しを行った。

3、10月7日～9日に杉澤、今井

大橋の3名は出合所小屋、263

2m峰に荷上げた。

4、10月7日～9日に後藤、山口、

佐野、榊原は出合所小屋、聖平小

屋、茶臼小屋に荷上げた。

5、11月18日～19日に杉澤、今井

小川、栗城は富士山吉田大沢で雪

上訓練を行った。

6、11月22日～23日に後藤、毛利

川口、榊原、海野、山口は富士山

SL今井芳明( ) 海野良明

( ) 榊原由美子( )



た。それから「何々あるよ」  
「ただし車まで行けば」というのが大いにハヤる。これにはいろいろ皆で大笑いした。僕達は気持ちのよい小屋でリラックスし、大いに語り、飲み、食べた。酒は毛利差し入れのオールドだった。

16時、気象係の川口が天気図を取る。ハッキリとした冬型で明日も安定と判断する。空気が乾燥しているのでストーブの薪が良く燃える。裏の水が氷結するので汲んでおこうとすると佐野が「後藤さん絶対凍りませんよ。賭けてもいいです」といった。僕は「では、1万円賭けよう」という。僕は100%凍ると思った。オールドも終わったので寝る。

12月31日(晴)

へタイム 起床2:00 出発5:00  
12632m峰16:00(泊)

頭がガンガンする。昨夜飲み過ぎたらしい。角も半分なかった。あきれたものだ。川口のアイゼンの調子が悪く遅れ磐田に先を越される。足回りは雪が多いので二重靴の杉澤を除き完全装備とする。外に出るとヒヤッとして気持ち悪い。例の水道は完全に凍っていた。出発して5分程で川口のアイゼン

が外れた。直して歩くとまた外れる。固定バンドが悪そうなので一本締めでやる。それでも外れる。アイゼンがオーバーシューズの寸法に合っていない。アイゼンなしで行く。30分はロスをした。伐採跡の急斜面を越えて東尾根に出た。上河内岳の朝焼けが美しい所で8ミリを回す。尾根も傾斜を増しザックも肩にくい込み苦しい登行になる。赤石岳が見える肩までこないと楽にならない。

杉澤と川口が先行して見えなくなる。僕達はとても腹が減ったのでミカンと大橋の持ってきた羊かんを食べる。毛利も余程なのか珍しく甘い物を食べている。しばらく行くくと再び伐採跡地に出る。ここが肩で赤石沢の向こうの赤石岳がすばらしかった。樹木がなく風当たりが強く寒かった。少し行くと杉澤、川口が待っていた。風のない所まで行き昼食にする。今朝焼いたモチを食べる。少し固いが仲々うまかった。杉澤が大橋にミカンを出す様に言う。僕達はそれを聞いて「実は先程あまり腹が減ったので皆で食べた」と言うと、彼は少し怒り「腹が減ったからといってそれ位我慢出来ないの」と言った。我慢強い彼には僕達のし

た事が大いに気に触った様だ。

そこからは杉澤、大橋、佐野が先行する。僕と毛利、川口はゆっくり行く。天候は相変わらず安定していた。陽当たりの良い所で大休止。毛利は先程から腹の具合が悪いと訴えている。モチの消化が悪いのか。僕は僕で何となくダルクて力が出ず意欲がなかった。何か今回はおかしい。緊張感も無いし新鮮さも感じなかった。一体どうしたのか。最近どうも山に億劫になっている。例えば城山で人工登攀してもちっとも面白くない。今、子供も生まれたばかりだし、精神的に余裕もないこともある。いずれにしてもスランプだった。

30分程で出発。急登を行くと見覚えのある2632m峰だった。全員で雪をならしてテント設置。僕は持参したアマチュア無線機でオンエア、CQを出すと井川の入谷さんが出た。ひと通り今日の行動を報告する。こうして下界との連絡体制は常に確保しておく。何しろ遭難した場合少しの救助の時間差で助かったり、亡くなったりすることが多い。入谷さんも山はかなり登っている人のようだった。夕方今度はCBで今日入山した聖沢隊を呼んでみると、あまり

明瞭でないが出た。彼等も合所小屋に到着した様だ。それにしても時間が遅いなどといひ合う(幸は林道を歩いてきた)。

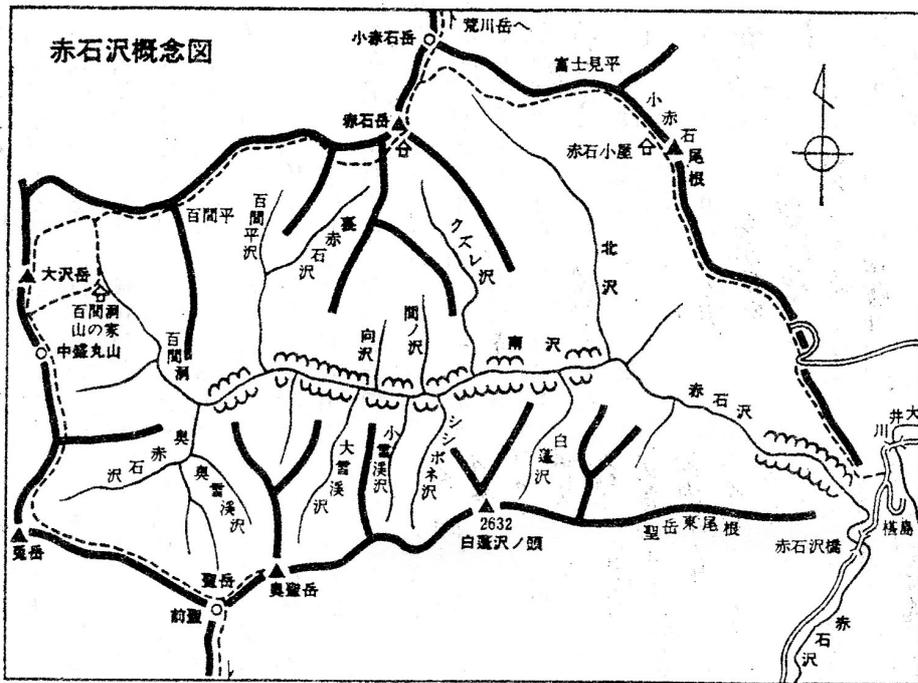
夕食は昨夜に続き牛肉パティ。全員すごい食欲だ。残りの角もたちまち終わった。何か無いかと捜したら、川口が聖沢隊女子の為に持参した赤ワインがあった。毛利が「俺が管理する」といつて取り上げる。飲むが、「ワインではいくら飲んでも酔いやしない」などと文句をいっていた。

夜、再びCBで交信すると山口が出た。電波は強く明瞭だった。全員元気で林道を歩いてきたとのこと。明日の行動、装備、明朝3時交信を確認する。僕達は大晦日なのでこの1年を振り返り語り合う。紅白では、山口百恵と沢田研二が歌っていた。16時の天気図では日本海に小さな低気圧があり、ゆっくり東に向かっていった。明日は少し雲が出るかもしれない。

1月1日(曇のち晴)

へタイム 起床2:00 出発5:00  
1聖岳 : 1聖平小屋 :

(泊) (タイム不明)  
川口に「2時ですよ」といわれて飛び起きる。隣に寝ていた杉澤



が「おめでとう」といって起きる。朝食は元旦らしく雑煮だった。3時に聖沢隊を呼ぶが応答はなかった。予定通り出発。まだ真暗な樹林帯をヘッドランプをつけて進む。この辺りは二重山稜になっているのでルートファイディングが難

しい。1ヶ所どうも良く分からなくて僕と杉澤と佐野で捜す。佐野が正しいルートを見つけたが夏道と同じだった。1度窪みに降りて右の尾根に移ると森林限界だった。やがて尾根は次第に細くなり、両側がスッパリと切れ、赤石沢と聖沢に落ちていく。

この東尾根は上部より下部が鋭い尾根を形成している。従って山頂付近は平らでそれが聖岳の特徴でもある。この辺りは昔は海で百間平、静高平など浸食された平らな所は多い。時折突風が体を揺るがせる。暗いので足元が分からず緊張する。ここで1歩間違えると大変だ。昨年もいろいろの人が山で逝った。ダウラギリに逝った木暮、谷川に散った今

野、K2に消えたニック・エスコート、皆一流の登山家だ。彼らはいつも思っていたに違いない。自分だけは絶対大丈夫だと。反面他の遭難を知った時「・・・いつか自分も・・・」との思いもあつたろう。だが、そういう懸念も、たぶんいつも誰もそうなのだが、山の絶対的な魅力の前に色あせてしまうのだろう。ただいえることは、常にベストを尽くすこと、引返す勇気を持つことである。

やがて東尾根は最大級の傾斜となる。当初ここは雪が多いと最悪とマークしていた所だがそうでもなかった。迫力ある所なので杉澤大橋にはもう1度降りてもらい8ミリを回す。後から僕、大橋、川口が続く。頂上はもうすぐなので気分的に楽になった。奥聖に登ると風が当たった。頂上手前の風のない所で大休止。朝、雲の多かった空もきれいに晴れ上がり、駿河湾の向こうに達磨山が見えた。数分後、展望の頂上に立った。風が強く寒い。僕は冬の聖岳はこれで2度目だった。下りは雪が多いと悪いが、今年は少なく楽だった。ブラブラ下り聖平小屋着。時間が早かったので空いていて11名分は確保出来た。佐野と荷上げ品を取

りに行く。荷物は完全だった。毛利、杉澤は水を汲みながら聖沢隊を迎えに行く。交信時間なので呼びだすと、小川の元気の良い声が入る。全員元気で12時頃到着予定との報告。彼等の為にコンソメスープを作って待つ。毛利が先程から落ち着きがないので「どうしたの？」と冷かす。「彼女を(坂牧)を迎えに行きたければ行ったら」と言う。「じゃー行ってく」と出かけた。

小屋の中はマイナス4度でジツとしていてと意外と寒かった。結局聖沢隊は1時間遅れて13時に着いた。毛利も彼女？に会えてゴキゲン。我隊もこれで総勢11名となり、普段の活動のようにワイワイ、ガヤガヤ急に賑やかになった。そして先程までの体験を報告し合う。聖沢は思ったより雪が多く、大変だったようだ。坂牧、栗城が紅茶を入れてくれた。湯気が小屋の窓から差し込む西陽に光っていた。何という幸せな時だろう。毛利と竹端が昼寝をしている間、残り少ないウイスキーを飲んでしまい、毛利におこられてしまった。調子に乗り過ぎたと反省。

16時川口が天気図を取ると西高

東低の冬型だった。明日は大丈夫だろう。夕食後、明日の行動の打合せをする。明日下山しようという意見。ウソッコ小屋までという意見。機会の少ない冬山なので陽が昇ってから行き、8ミリを回したいという意見。いろいろ出たが、結局明日横窪小屋に着いて決定することにした。

僕はCLなので決定はするが、その前に意見は聞いておきたい。起床1時、出発4時と決め早めにシユラフに入る。小屋の西側は入口から奥まで僕達が占領し壮観だった。夜中トイレになると満天の星だった。ヒューンと風が渡る。「今日は元旦だったな」何か忘れ物をした様な気がした。

1月2日(晴)

へタイム 起床1:00 出発4:20 上河内岳7:40 茶臼岳9:50 横窪小屋12:40 (泊) 畑雑ダム 長泉21:00

昨夜に比較すると暖かい夜だった。今朝のメニューはレトルトライスにカレー。お湯を沸かし御飯を温める。その時、2階から「うるせえぞ、お前ら三島労山だろ」と怒鳴る声がある。少し前より文句をいっていたらしいが聞こ

えなかった。昨年も甲斐駒の六合目石室でも怒鳴られた。我会はいつも朝早いのでこうしたトラブルはある。大体連中は遅寝遅起きなのだ。「すいません」と言っただけで通りに支度を済ませた。

出発の準備をするが竹端のアイゼンバンドが短かくて苦勞する。彼のアイゼンはちょっと昔の「ヒッカケ式」なのでバンドが短かいと回らない。僕も手伝って何とか回した。全員揃い出発の瞬間の短い緊張。そして少しの不安。それをほぐす軽い打合せ。今日は初心者もいる足の揃っていないパーティーなので気を配る様注意する。月の光が煌々とする樹林帯を登り上河内岳めざす。トップは山口、次に坂牧、栗城と続く。森林限界で小川と栗城がアンザイレ

ン。もしもに備えてのことだ。聖岳の巨体が迫る。アイゼンのうっろな響き。この辺りで川口のアイゼンがまた外れる。杉澤が付添う。スリルのある魅力的な細い雪稜をたどると頂上に達した。杉澤と川口がまだ来ないので僕と大橋が迎えに行く。川口のアイゼンは結局駄目でノーアイゼンで来た。

11名揃って茶臼岳めざす。もう何も心配はなかった。夏はお花畑

になる所で大休止して茶臼岳隊を呼び出す。すぐ今井が元気な声で「明けましておめでとう」と言った。全員元気とのこと。明るい海野の声、はしゃぐ榊原の声も聞こえる。茶臼岳コルで14名全員が合流、感激的な瞬間だった。こんな上手にドッキング出来ると誰が予想したか。皆は茶臼岳に向かい僕は茶臼小屋に向かい荷上げ品を回収して待ったが、仲々降りてこないでキスリングに一斗缶を乗せて1人で横窪小屋に向かう。

小屋で待っていると30分位して大橋が1人で降りてきた。陽当たりの良い所で寝ていると13時に皆は下ってきた。毛利より栗城が途中登山道より落ちたと報告があった。ちょっと疲れたのであろう。小屋に入り今後のことを協議する。重苦しい雰囲気になる。

僕と大橋、川口は今日下りたいと表明する。山口はそれに強く反対した。CLの僕が下山するのは反道義的という。結局、CLは以後毛利が務め、3人は下山を決定した。意外と早くダムに到着し、山口のカロラで三島に向かう。途中31日に交信した入谷さんと再交信。「是非寄つてください」との言葉を辞し車を飛ばした。

1月3日(晴)

へタイム 起床4:00 出発6:30 畑雑ダム10:15 三島

下山道は悪かったが全員無事ダム着。毛利、海野、佐野は聖沢の車を回収。残りはゲートが閉じているので支柱の横に車道を作った。道具がなくこの作業は困難だったが、良い指導者がいてうまくいった。車も回収されゲートも無事通過してダムサイトで記念撮影後、三島に向かった。

(文中敬称略)

(81年8月発行機関誌「くろゆり」第7号に収録)

### 解説

三島労山始まって以来の大規模な冬山合宿だった。どんな山行でもそうだが、会の初、中、上級者が一同に介せる山行が一番望ましい。行動を共にしてこそ人材は育つのである。その意味で、日程に若干の差はあったものの、これだけの山行を実践できたのは、当時は第1次隆盛期で最も充実した時期であり、女性の活躍も目立った。しかし、翌年「みちくさハイキングクラブ」が分離独立し、三島労山は一時的に衰退していった。